

昭和五十一年十月二十五日 講演

「私の仏教概論」

宗教学者 増谷文雄先生

今晚は初めて皆さんにお目にかかりますが、私はこの和敬塾を創立の時から知っております。さらに私にとりましては、和敬塾にお礼をいわなくてはならないことが一つ二つあるのですが、それは何であるかといえますと、和敬塾が出来て暫くしてから、私は長男をむりやりに入れて頂きました、学校卒業までちゃんと居りました。これは差大を出まして、今は一応半人前ぐらいの画描きになっております。それからその後また九州のほうから出てまいりました親戚の子供を一人お願いいたしました。これも無事卒業いたしました、今はある医科大学の助教授をやっております。さきほど、理事長さんに報告をいたしました、お礼を申しあげておいたのをごいいます。ありがとうございました。

さて、私は「私の仏教概論」などという変な題目を出しておいたのをごいいます、これはこちらの壇上に私はあがりまして、有難いお坊さんのような話をするつもりは全然ありません。私は学校を卒業してから五十年になります

が、この一生を一人の学者としてやってまいりました。従って有難い話をするのは大嫌いなんでございます。だからといって、専門にやりました仏教の話を堅苦しく申しあげようと思つてはいないのであります。大体、皆さんはいろいろの概論を読まされるだろうと思うのですが、概論というものは、外国人の言い方で申しますと、すべてスケルトンで、骨ばっかりで、一向面白くなく、ひからびたようなものですが、そういう話をするつもりはないのをごいいます。だが、やっぱり自分でやりました学問の話の少しばかりのところを申しあげようと思ひまして、それに「仏教概論」に私という字の上に冠しまして、それで私は何故仏教というよ

うなものを勉強するようになったかという、その自叙伝を申しあげようと思うのをごいいます。仏教概論というのはひからびたものをごいいます、私が、「私の仏教概論」と申しますと、これは多少私の血が通い、肉がくっついてくるものだとご承知を願ひたい。そういうつもりでこ

ういう題目を出しておいたのでございます。自叙伝というものは、本人がしゃべると、必ずこれは懺悔録みたいになるのでございます。私もまたこの私の仏教概論の始まりのところは、やはり自分の懺悔録を申しあげなければならぬのであります。

私は九州の産であります。もっと詳しく申しますと、今は北九州市ということになっていて小倉という町の生まれでございます。そこのお寺の長男に生まれてしまったのです。私と仏教との縁というものは、生まれた時からのものでしたが、私は寺に生まれ合わせたことを有難いとか幸いであるかと思つたことは、その頃は一度もなかったものであります。どうしてこんな所に生まれたのだろうかと思つておりました。何故かと申しますと、お寺の長男でございますから、順調にまいりますれば、後を継いで親父の次の住職にならなければならぬのであります、お寺でやっておることが、どうも私には解らなくてしょうがなかった。解らなく

てしようがないというより、若い私の頭脳にとりましては、疑問だらけであったのでございませう。それで今でいえば、高等学校でございませうが、昔でいいますれば、中学校の頃の私の自分の考えておりましたことをよく覚えております。私はどうしてこの寺の後継ぎになることを免れようかと思つて、一生懸命に考えておつたのであります。中学を終わるとお坊さんの大学に行つて——お坊さんの大学に行つておられる方がおられたらちよつと失礼なことになるのですが——そこを出てお坊さんになるという道を歩くことを、如何にして脱出しようかと思つて、そればかり考えておつたのでございませう。ところが幸か不幸か、幸いといつてよいと思ひますが、一つチャンスがやつてまいりました。それは私の中学校の名譽のためにいっておかなければなりません、昔の小倉市という所に、小倉中学というのがあり、現在は小倉高等学校となつておりますが、その生徒であつた私が四年生を終えた時、ちよつと学校制度が変わりました。それまでは旧制高等学校に入る入学試験は、中学の五年を卒業しなければ受けれなかつたのが、四年を終了して受けることが出来るいわゆる四終受験ということが出来るようになったのであります。四年を終えた四月になつて、議会のほうでいろいろやつてお

今年の七月には高等学校の試験を受けられるぞ」ということになつたのです。七月というのは、昔の高等学校、昔の帝国大学は、これはちよつと外国の大学と同じように、秋から始まる制度であつたんです。昔は面白かつたんだなあ、と思われ方がおられるだろうと思ひますが、そうすると、外国に行つて勉強するのにも大変具合がいいので、もう一度それに戻したらよいのになあと、私は考えておるのでございませう。それで四月の終わりにそういうことを知つて、七月の始めに試験を受けたのですが、五月と六月の二か月の間は、私はその時だけは夢中になつて勉強しました。何故かという、このチャンスを逃したら、お坊さんになる学校に行かねばならないんだ、このチャンスを何とかしてつかもうと思つたのでございませう。それがどういう具合か、不思議にも無事に合格いたしました。ですから私は四年終了で高等学校を受けました最初の人間なんでございませう。これが今になつてもいささか誇りでございませうが、私の誇りはその時はそういうことでなくて、よかつたと思ひましたのは、これでお坊さんの学校に行かんでもよいだろうと思つたのでございませう。ところが高等学校三年終わりました、ああ、高等学校の名譽のために申しておかねばなりません、九州者ですから熊本の本の旧制の第五高等学校でございませう。その高等学校を三年無事

に終わりました、東京に出てまいりまして、東大に入るといふ段取りでございませう。その時に東大の願書を書く段になりましていろいろ考へたのですが、私にとりましては何と申しますか、私の仲間は殆どみな、法科とか政治科という方面に行くように願書を準備いたしました。私はどうもそういう方面に行く気にならな

い。行く気にならないというより、そういう方面のことに全然関心がなかつたのであります。何に関心があつたかという、たつた一つどうも仏教は解らないなあという関心を持つておつたのです。その意味において、私は実に仏教に對してはその頃は不信心な若者であつたわけですが、その不信心に引かれまして、私は東大の入学願書を宗教学という学問を選んで文科に入りました。そんなところに願書を出しましたところが、今度は親父が私の顔をつくづく見て、お前の気持ちが解らんといいました。あれだけいやだいやだといつておつたのに、お前は仏教の勉強をするつもりかといつたのです。「そりや一体どういう理屈だ」。その頃は西田哲学などというものがポツポツはやり始めてまいりました時代で、私も多少そういうものにかぶれておりましたので、西田先生の言葉を借用しまして、親父に答へたことがあります。どう答へたかといひますと、それは『矛盾的自己同一』でございませう」と言つたのです。矛盾

するのが私でございます、といったような言葉になると思います。「解らんことをいう奴だなあ」と、親父さんはそういつておりました。それからとにかく私は、今日に到りますまで、まっすぐほぼ五十年を越える月日をやってまいりましたが、それで一体仏教が解るようになったかというところ、まだ解らないところがたくさんあります。ただし少しずつ解ってきたのであります。変なことするなあと思っていたのが、ああそうだったのかとこう気がつくのであります。気がつくというのは解るということなのであります。一生懸命疑問に思っておりました。あそこやここが、ひよこつと解ってくるのであります。そのどういう解り方をしたかということ、一つ二つ申しあげてまいりますと、それが私の懺悔録でもありますし、私の仏教概論になっておるのでございます。

大学を卒業いたしましたも、何にも解っていません。なかつたのでございますが、それからただひたすらに勉強をしておりました間に、私は日本の坊さんですが、道元禪師の『典座教訓』という一冊の本を読んだのです。その典座教訓によつて、まず一つ私の眼が開かれてまいりました。これは今でも忘れられないのであります。ちょうど私はその時二十三歳ぐらいだったと覚えていますが、道元という方が、まだ禪師というところまで行つてない時に、中国に留学をして

勉強をしようとした。勉強をしようとしたというより、一体仏教とは何んであるかということを追求しようと思つて、本国へ行かねば駄目だと思ひ、中国に行つたのであります。本国にといひましたのはその頃の考え方、仏教の本国は中国ではなく印度であつたのですが、とにかく中国に行つて仏教は何と考えられているかをつかまえようとしたのであります。その時、道元さんも年が二十三歳であつたようであり、その頃はもう昔の遣唐使の船などというものはありませんでしたので、ちょうど支那へ貿易に行きます船に乗つて出かけておられますが、その貿易船が上海の少し南の方の浙江省の慶元府というところへ船が着きますと、そこで二、三か月その船は停泊して、持つて行つた物を買つて帰つて来るわけであり、道元さんも暫らくの間、船にとどまつておつて、会話の勉強をしようと思つておつたらしいですが、そういうところへひよこつり向かうのお坊さんがやつて来た。何をしに来たのかというと、椎茸を買ひに来たというんです。そこに道元さんが先ず会話の練習及び向かうの仏教の事情でも少し聞こうと思つて出かけたらしいんです。『典座教訓』の「典座」とは禪寺における台所方の役目を仰せつかつておられる者のことです。そのお坊さんも大分齡を取つておられるので聞いてみると、六十を越えておつたらしいので

す。そこで道元さんは、降りて行つて会話をしたのですな。「あなた何処からおいでになりましたか」というと、「阿育王山からやつて来た」「阿育王山というのは何処にありますか」「ここから三十四、五里向かうの方だ」と。三十四、五里というと大分遠いようではありますが、これは中国里なので、日本でいへば四、五里か五、六里ぐらいの所で、そんなに遠くではないのであります。そこからやつて来た。「何をしにおいでになりました」「わしはねえ、阿育王山の禪寺において典座の役をやつておる。明日はちようど五月五日でおめでたい日だから、一つわが寺におる雲水たちにご馳走をしてやろうかと思つて、いろいろと台所をかきまぜて見たけれども一向何もない。噂に聞くと、ここに日本の船が椎茸を売りに来ているので椎茸を買ひに来た。それで美味しいおしたじ(醬油)を作り、ソーメンをご馳走してやろうと思つてやつて来たんだ」。そんな話が、道元さんが書きました会話の中に出て来ます。そういう話をしておりますうちに、道元さんの気持ちになつてみますと、どうも話がおかしいと思つたらしく、「典座が、典座が」と台所の話ばかりするので、それから、そのうちに道元さんがどうとう、あなたは、大分齡を取つておられるようだが、もう少し一生懸命に坐禪をやつたり、語録を読んだり、一生懸命おやりになつたらどうですか、

典座などを一生懸命やっておつたって、何のよきことやある、ということをやったらしいのであります。そうしましたところが、それまで好々爺で話をしておりました老典座が、かんらんかんと打ち笑ひまして、「外国の好人、未だ伝道を知得せざることあり、伝道を了得せざることあり、文珠を知得せざることあり」とこつ言つたらしいのです。どういふことかといひますと、外国から来たお若いのが、あなたはまだ仏教というものが何か、全然解つたらんようですなあ。もちろん、あなたも坊さんの恰好をしています。経典などというものはどういふものか全然解つておらんらしいですなあ、やられたらしいのであります。

道元さんは、日本から意気込んでやつてまいりまして、仏教のぎりぎりのところをつかもうと思つて、やつて行つたところが、いきなり慶元府に未だ上陸しない間に、お坊さんにつかまつて、あなたは仏教というものをまるで解つたらんなあ、といわれた。それで本場のお坊さんがそういうんだから、自分はまだ若いですから、その時にはびつくりしたらしいです。まるで仏教解つたらんとわしいわれたんだが、背中に汗をいっばいかいて肝っ玉がひっくり返るようになつたと、自分で書いております。それでは仏教とはどんなものか、経典といふものはどんなものか、といひて、その

老典座に一生懸命に取り纏るようにして聞きますと、その老典座が悠然として、そこは原文では難かしい文字が使つてあるのですが、「その問所を蹉過せずんば、豈その人にあらざらんや」といふ中国語で書いた文章があります。あなたも問うところでもつまずき転んでやつてみなければ、一人前にはなれないよ、といひておられます。仏教とは口先で教えてもらつて解るものじゃないんだといひて、悠然と立ち上がりまして空を眺めながら、「日暮れなん急ぎなん」といひて、帰つてしまつたらしいです。そういう文章を私が話すとどうも面白くなく、印象が深くないと思ひますが、私はその文章を今でもどこどこ覚えているのであります。実に生々とした典座教訓の会話なのであります。道元さんは仏教というものはどういふものであろうと考へて中国に行つて、お前は仏教解つてないと、ポンとやられました。それじゃどういふものでしょうかといひたら、そこでつまずいて見ろ、そうでないと解らないといわれた。それから一生懸命に六年の間、中国において禅寺で修行をやつております。修行をやつておるといひても、いろんなことがあるんでしようが、そして向こうでいわゆる印可を与えられ、お前は悟つた、出来たといひられて、帰つて来たわけでありませう。そういたしました日本に帰つて来たら、やがて皆さんのうちでご覧になつた方

があるかも知れませんが、今、宇治に興正寺というお寺があります。あのお寺はもと京都の深草といふところにあつたのですが、そこにお寺を建てまして、日本において本式の禅の道場即ち僧堂を造り、僧堂開きの時に、道元さんは挨拶をやりました。僧堂開きの挨拶ですから、私はどういふ修行をやつて来て、どういふところに到達したかと、ポンとそこで出さなければならぬのであります。それを讀んで見ると、六年間中国におつて、お前は仏教解らんといわれた人間が、ああそうかといひて頷くことが出来たその内容を語つておるのでございませう。どういふ言ひ方をしておるのかといひと、こんな言ひ方ですが、文章をそのまま申しますと、ちよつとお解りにくいと思ひますので、少しくだいて申しますと、「わしは中国に行つて向こうの禅寺をほんの少しばかり歩いて来た。そしてその間にぼんやりしておつて、ただ一つ『眼横鼻直』といふことが解つた」「当下に眼横鼻直なることを認得して人瞞を被らず」。ただ中国に行つて解つたことは、何かといひと「眼横鼻直」といふことだといふのであります。そんな字解らんとおつしやるならば、この字をじいっと見ておつて下さると解るのです。眼は横向きについている。それから鼻は縦向きについている。眼横鼻直という言葉は、ただそれだけの意味であ

ります。それによって何を言おうとしているかという、それは「人間の在るがまま」ということであります。人間は人間の在るがままをしておるのがよろしいということであり、眼横鼻直なることがよく解って、そして「人瞞」というのは人の瞞着、ごまかしです、そういうものを一切被むらない。そういうものに変な哲学の体系だとか、仏教の教理だとか、そういったものがたくさんありますが、それが人瞞であります。そういうものを一切パーツと脱いでしまったというんですなあ。故に「一毫の仏法なし、空手京に帰る」なんていっています。だから向こうへ行つて、仏教を習つて来たなどということは何もない。空手で帰つて来たわいと、こういっております。「眼横鼻直」という字が、恐らく道元さんが中国に行つて得て来たものをいう表現の、ぎりぎりのところだと思つてあります。

禅というものは一体何であるか、何でもありません。結局、人間の在るがままを完成するものである。変な理屈や、変な体系や、変な哲学などというもので構成されておるものではないんだと言っております。こんな話ばかりしておきますと、いったいあいつ何を言ってるんだと思われそうですが、私ともういちど「人瞞」を考えて申しあげる言葉などというものは、つまらん言葉になってしまい、どうやって眼横鼻

直という言葉の説明したらいいか、ここにやってみます間、一生懸命考えておったのであります。そうしましたら、変な禅坊主の話を思い出しました。それは趙州という禅坊主がおります。六十になつてから修行を始めたという坊さんであります。それじゃ後短かかったらうなと思うと、百三十ぐらいまで生きたといいますから、随分桁のはずれた坊さんだと思つのであります。その趙州という人の語録に、「趙州洗鉢」という逸話がございます。その逸話をちよつと申しあげて見ると、それで解る方は解つて頂けるかも知れないと思ひます。趙州という坊さんは一禅寺の主になつておりましたので、雲水がたくさんおります。一人の新しい雲水がこの寺にやつてまいり、第一日目か二日目に趙州に会つて、「私は新参者でございます。どうしたらよろしうございませうか、お教えを願ひたい」と、こう言ひましたら、趙州は、「あなたは粥を食べたか」「ハイ、粥は頂戴いたしました」「それでは、鉢を洗つて行くがよろしい」「ハイ」、それだけ説いたということになります。いったいこの禅寺に入つて来て、どうしたらよからうかと言うたら、「粥を食べたか」と、「食べました」と言つたら、「食器を洗つて行くがよい」と、いうわけですなあ。これが有名な「趙州洗鉢」という語録になつて残つております。粥を食べるといふことは、生きる

ために食べるのでございます。その生きるという、日々われわれはそれをやつておるのであります。それがきちんと出来てゆくということですが、これが何よりも人生教育では大事で、さきほどに申しました典座は、その日々生きる一番大事などころの台所方の司をやつておる。これは一生懸命になるのは当たり前だと、実は典座は言つておるのであります。人間が一日如何にして生きて行くかということが一番大事なのであります。仏教というものはそんなものだといふことが、そこに語られております。典座もそういうことを語つており、趙州もそういうことを語つております。

それまで、お坊さんというものは、死人の世話ばかりするものかと思つておりました。そうしたところが、人間として最も人間らしく生きることが仏教だと、典座が言ひ、趙州が言ひ、等々ということが解つてまいりまして、ホホウそれじゃ一つやつて見るかと、それから私は仏教の勉強というものに対して興味が乗つてまいったわけでございます。

それから私は、お釈迦様が仏教の大本でございますから、先ずそこから調べて行こうと思ひました。お釈迦様のことを調べるといつても、一生かかるわけです。一生かかってもまだほんの少ししか解らないのでございますが、それ以来今日に到るまで、私はいわゆる原始仏教――

私はこれを根本仏教といい、これをコツコツ勉強して今日に到っております。その中から、ああそうだったのかと思つた話を、一つだけ申し上げさせて頂きたいと思ひます。

それも何でもなし話であります。お釈迦様はご存知のように、日々托鉢をいたして食べております。托鉢というのは、家々の前に鉢をかかえて立ちます。そうすると、立派な修行をしておるお坊さんにご供養だということで、何かを入れてくれるのです。托鉢というものは今の典座教訓やら、趙州洗鉢やなんか、やつぱりはつきり通ずるものがあるのでありますが、ある日のこと、お釈迦様が田舎の方のある大きな邸の前に立つた。そうするとひよつと中を見ますと、中の方ではちようど田植時らしくて、非常に忙しそうにしております。お釈迦様はちようど朝飯の用意が出来ているところに行つて、托鉢をしたわけです。そうすると中からその家の主人が出てまいりまして、何かズケズケと詰問をしたらしいのであります。「沙門よ、私は田を耕して種を蒔いて、そして自分で取り入れて、そして食つておる。沙門よ、あなたも一つ自分で種を蒔いて、自分で取り入れて、食つたら如何でしょう」と、こつとやつたんですなあ。お釈迦様がそこで詰問を受けたわけでありませう。私は初めてそのお経を読んだ時に、「あれっ」と思ひました。私も多少のことはいろんなものを読

んでおりますが、その時に思ひ出しましたのは、「働かざる者は食うべからず」という主張でございます。お釈迦様はその時に一体何と答えるだろうと思つて、ずつとその経典を読み進めてまいりましたところが、お釈迦様はそれに対して、いとももの静かな声だつただらうと思ひます。お釈迦様は「我もまた耕し、種蒔いて食うのである」と、こつとやつた。その豪農の亭主が、働いて食つたらどうですかと言つたら、「わしも耕しているんだ」とこつとやつた。それならその家の主人が、それに対して今まで詰問しておつたのでありますが、こつとやつた。きよるきよるしてどうもお釈迦様の言うことが解らんものですから、頭をひねりひねり、あなたは「我も耕しておる」とおつしやるんだが、あなたが鋤で耕しているのを見たことがない。あなたが種を蒔いているのを見たことがない。あるいはあなたが牛を引張っているのを見たことがない。いつたいあなたが耕すという意味はどういうことか、いささかたじかたじかたなりながら、質問しております。そうするとお釈迦様がそれに対して答えておるので、どう答えているかと申しますと、そのところを經典は偈(げ)と申しますが、これは詩のことでございます。ポエムのことを印度ではガータと申します。それを中国人が偈と訳しております。お経の中にはすぐ韻文が出てまいります。

それをすぐ偈という言葉で言い表わします。お経の一番大事なことだけを、偈で表現するというのが、お経のしばしばとるところの文学的方法なのであります。どういったかという、少々長いことですが、その中の大事なことだけを申し上げますと、我が蒔く種は信である。我が耕す鋤は知恵である。道々私は身口意という体と口と心の三語を三行為において悪を除く、それが私の草取りである。私の牛は精神という牛であつて、進んで退くことを知らず、行きて帰ることなし、そして私の心を安らかに運ぶ、というような方をしております。大事などころは、はじめ二、三句でございます。我が蒔く種は信である。我が耕す鋤は知恵である。そんな偈が出てくるのであります。どうしてそんな偈が出てくるのであらうかと、ひよつと考へておりますうちに、私もいくらか横文字を習ひましたので、ラテン語やら英語やらが出てまいります。それはカルチャー (culture)、あるいはカルチュレーションという英語であります。どうもヨーロッパ言語におきましては、人間の田を耕すという言葉と、それから人間が教養を開発するという言葉とが、同じ言葉で語られているのであります。英語では教養はカルチャーでございます。農業は、その上にアグリをつけて、アグリカルチャー (agriculture) であり、耕すという言葉は、大地を耕す時に使う言

葉で、そして人間がその人間性を開発する時にも使うということに、ひよつと気がつきました。そうして調べてみると、印度の言葉におきましてもカルシーという言葉を使いますが、その言葉

もまた、どうも両用の意味を持っている言葉らしいのです。お釈迦様はどうやらその言葉を利用いたしまして、汝は耕して食つたらどうだと言われた時に、そう詰問された時に、私も耕しているのだといったのであります。つまり百姓の地主のあるじが言った言葉は、大地を耕して食を得て食べたらどうだと言っておるのであります。これもまた人間の重大なるものであります。人は働かざる者は食うべからずだと思ふのであります。しかし人間の働くということの中には、もう一つのカルチャーがあるのではないかと、お釈迦様は言っております。お釈迦様のやっていることは、仏教のやっていることは、もう一つのカルチャーである。人間の在るがままでは、それはなお大地の荒地と同じようであります。それを耕し整えて行かねばならないのであります。そのことをお釈迦様はそこで言っております。それで私は知恵でもって耕すんだと言って、我が耕す鋤は知恵である。我が蒔く種は信である。こう言っておるのであります。そういうところにひよつとぶつかりまして、それじゃ私も働いていないわけじゃないんだ、仏教を一生懸命やっておるのは、私も耕すんだ

なあと、私もまた人の前に立つて我も耕すといういい方を、ある一つの自信をもって言うことが出来るようになります。

仏教を勉強しておる、それは何かというと、それは自分を耕し、また人を耕すんだ、そう私はお釈迦様から教えられることが出来たのであります。そういうことを幾つも幾つも教えられておりますうちに、私としましては何と申しますか、次第に仏教は人間の在るがままをほかにしては仏教はない。それと同時に、人間を開拓することをほかにして仏教はないということとが判りました。そういう仏教をこつこつ調べておりますうちに、結局、私が仏教から学び得たことは、それはいろいろな意味における人間の機微というものであります。こつこつ仏教を勉強することによってこれを知ることが出来てまいりました。そしてひよつと気がついてみますと、私は我が寺を、逃げだしたい逃げだしたいと思ったその寺に対する一番の大きな疑問の一つは何であったかという、私のお寺はいわゆる浄土宗であつて、そこでは皆さんもご存知の通りに、お念仏を唱えると極楽に往生できるという言い方をしております。お念仏を唱えると極楽に往生できるなどというのは、一体どういうことであろうか？ そんな馬鹿な話を、そんな架空な話を、自分が住職になつて一生懸命に人に説くことが出来るものか、と私

は思つておつた。実をいうとそれが解りたかつたのです。そういうことが気になつておりましたものですから、それをこつこつ調べておりました。そうするとそういうものをやっておりますうちに、だんだん霧が晴れるようにして、それが解つて来る。解つて来るというのは、実は不思議なものでありまして、一生懸命それを勉強しておる時には、調べておる時には、あるいは辞書を引張りだしている時は、本当は解るものではない。長いことやっておいて、そしてそれをああだろうか、こうだろうかと、ポケットに入れます、あるいは懐に入れます、温めておりますうちに、ああそうだったのかと解つてくる。それが本当の解り方であります。禅で悟りなどというでしょう。あの悟りというのは、どうやるかという、お師匠様から公案などというものを頂いておつて、その公案を心の懐に入れておいて、ああひねくり、こうひねくりする。そのことを禅の坊さんは「粘弄(ねんろう)」という。粘というのは粘土の粘の字、弄というのはもてあそぶという字であります。こうやって、手の中というより懐の中でもてあそんでいるうちに、ああそうか、といった所に到達するのが悟りだそうです。悟りとは理屈では絶対に解らない。何となれば悟りというのは、それは直感なんでありまして。直感というのは理性をもつて到達するものではない。いや、直感でもつ

て到達したところを、後から整理するのが理性の仕事であります。いや理性というより、カント先生の言葉でいえば、フェルシュタント (Verstand)、即ち悟性の仕事は、それなのであります。私どもが大学で講義をいたしますのは、その悟性の営みだけを講義しておるのであります。もう一つその前の大事な悟りというのは、直感の仕事であります。直感は教えることは出来ないであります。そういったものが、長いこと粘弄しておりますうちに、何んとか仏教というものを、あるいはこんな馬鹿なことがあるものかと思っておりましたよな事柄も、解らせてくれるのであります。阿弥陀様のお名前を口で唱えれば、即ち念仏すれば往生が出来る、救済されるなどといったようなことは、いったいどういうことなのか、不思議でつまらなくてしようがなかったのであります。それをずっと道元さんやら、お釈迦様に教えられているうちに、何時の間にか解ってまいりました。私には、「仏教とキリスト教の比較研究」という本が、二冊あるのでございます。これは、私自身が英訳をいたしまして、“A Comparative Study of Buddhism and Christianity”という本になって出ており、海外でも割合に読まれています。五版ぐらい版を重ねておりますものですが、今から十五、六年前に、私はまだ六十にならぬ時、海外のロックフェラー財団から、あ

の著者にキリスト教を見てもらいたいということ、金をどかつとくれました。私はそれで半年あまり欧米をぶらりぶらり見て歩きました。あそこへ行っては一月留まり、あそこへ行つては二か月留まり、ということ、ハーバードに行つては二か月のんびりと暮しておりました。そして、そこで図らずも講義をやらされました。シカゴ大学へ行って、一か月ほど滞在して一ルームを貰い、ぶらりぶらり暮していたら、そこでも講義をやらされました。そしてある日のこと、キリスト教を見せたいというのでありますから、日曜日には、誰かが必ず私を誘いに来て、教会に連れて行くのです。その日はマルクス・バルトという人が説教をする日だった。皆さんもご存知かもしれませんが、実は私は大分前に亡くなったカール・バルトという神学者を非常に尊敬しております。外遊の時、先生にスイスで会いたいと思っておりますが、ちょうど先生は二階から落ちて怪我をし、病床におられて面会のできない時でした。ところがシカゴにやつて来ましたら、カール・バルトの息子のマルクス・バルト、この人も神学者で有名であります。今日はこの人が説教するというので、聞きに行きました。そうしたらその日は日曜の礼拝が終わって、直ぐ自分の家に招待して昼飯のご馳走をされました。その時、書齋で教授が「増谷教授よ。私は一つあなたに

質問がある」というのです。何んだらうと思いましたが、私に尋ねましたことは、仏教においては、阿弥陀仏の名前を唱えれば救済されるというが、それは何故であるかという質問が一番初めに出てきました。これは私がある意味において一生疑問にしておりました。またはつきりいうことの出来なかつた問題なのであります。さて来たなあ、とその時思ったのであります。その途端に私の頭の中に一つの句が浮かんでまいりました。どういう句であるかといいますが、これは聖書の文句で頭に浮かんでまいります。‘For with the heart man believeth unto righteousness: and with the mouth confession is made unto salvation’ (なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである)。これは聖書の中のロマ書第十章の十番目の句であります。ロマ書というのは、主とパウロの手紙を編集したものでございませう。私がこのロマ書の句を思い出しましたが、書いてないものですか、一生懸命ウイズ・ザ・マウスというふう唱えますと、途中から相手の教授も、私と一緒に唱えてくれました。何故かという、教授は実は神学者であります。中でも彼は、パウロの研究者として有名なのであります。どういう句であるかと申しますと、「人は心に信じて義とせらるる、口にいいあらわして救われるなり」という訳が聖書

には付けられております。何時の間にか私はその問題をやっておりますうちに、仏教の書物も聖書もありとあらゆる書物を読んでおります。

そのうちで、実はこの句を何時の間にか覚えておったのであります。そうしてその念仏を申して救われる所以は何であるかと、ひよつとそれを思い出しました。いったいそれで彼は納得したかといいますと、彼はすうつと立ち上がりまして大きな手を出し、私の前にまいるまして、「オー」とうなつて握手をいたしました。これはその時、彼がよく理解したからであろうと思います。私も今はそれをよく理解しております。ただし、これは理路整然としていい得るところのものではなく、悟性をもつて理性をもつて説明することの出来るところのものではないのであります。もしいうならば、表現するならば、ウイズ・ザ・マウス・コンフェッション・イズ・メイド・アントウ・サルベーションと口に言いあらわして救われるんだと、こう言い切るより他にないのであります。

そういう所までやつと辿りついて、どうやら一生仏教の勉強ばかりしてまいりました次第です。お釈迦様に言わせると、一生の間、我が仏教の荒地を耕し耕してまいりましたわけでございます。そして何時の間にか、お前は仏教学者だといわれるようになったのでございます。ただし、私自身はその出発から申しま

ても、何とまあ不信心者であろうかと思っております。不信心者がここに到りました懺悔録を申し上げまして、ちようどこれで一応何とも解らない私の仏教概論を終わりたいと思ひます
(拍手)。

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。